

落合の歴史、伝説とロマン

中井台地と御備射祭大絵馬



実物大レプリカと落合4村絵図

絵馬左上に社殿、神庭中央にはうすべりが敷かれ、社殿前には緋毛氈を敷いた上に緋衣をまとった高僧と僧侶3名、袴姿の武士が20名位座っている。僧侶の後には、弓、矢、御神酒が二ヶ所用意され、鳥居の所には的が松の木に掛けられている。毛氈の外側には、武士の女房と子ども、村人が見物している。絵馬右上に犬を2匹つけた男（犬番）と振り向く女房の姿があり、今とは異なる儀式が興味深い。

聖なる森であった中井御霊神社の神殿に奉納されている「備射祭大絵馬」がある。江戸時代、中井台地の知行者が、備射祭の様子を絵師に色鮮やかに描かせた貴重な絵馬で、区の文化財である。謎を秘めた中井台地のお宝でもある。

八代将軍吉宗公鷹狩と「備射祭絵馬」

「蓮華寺の鐘もつかせぬお鷹狩」 落合かるた

にあるように、落合・中野地方は歴代将軍、御三家のお鷹野として幕末まで狩猟が行われていた。享保2年1717年5月11日、五代将軍綱吉以来40年間廃止されていたお鷹狩が復活した。その翌年9月、「備射祭絵馬」が中井御霊神社に初めて奉納されている。1727年名主岩崎善左衛門に、「吉宗公江古田筋に於いて鷹狩出行にあたり、絵図を描くように」と指示があったが、その時の絵図の写しと古文書によると、翌年2月12日将軍吉宗が上高田一葛橋一四村橋一下田橋から御膳所江古田東福寺で休息とある。その後絵馬は、三回にわたって修復され、知行者太田健左衛門によって文政13年1830年に再奉納された

中井台地の知行者

家康から直々に土地を賜った旗本太田新左衛門信盛、譜代藤原朝臣細田嘉右衛門康勝両家は子孫代々、中井、葛谷、新井、片山、上高田、長崎、練馬の付近一帯のかつての知行者であった。お鷹狩りはいざというときのための軍事演習を兼ねていた。徳川三百年の幕を閉じ江戸が明治にかわる頃知行者は故里に帰った。「備射祭絵馬」はかつての武家社会を物語っている。

鎌倉街道

落合は古代からの街道筋であって、西のへりを鎌倉から平泉までのメインルート鎌倉街道中ノ道（西回りコース）が南から北へと貫通している。現在の哲学堂通りはその一部で、軍事道路であり奥大道と呼ばれていたが、平和が来て江戸時代になると忘れられた。そして鷹狩の御成道が村々に記憶され、「御備射祭大絵馬」が描かれ中井御霊神社に伝えられた。鎌倉街道中ノ道（東回りコース）は渋谷、大久保から雑司ヶ谷へと抜ける。

(文：岡本和代 おちあい 112号掲載に加筆)